

氏 名 ^{よし}吉 ^{しげ}重 ^み美 ^き紀 (助教授)

主な研究テーマ

リメディアル教育 (英語)、ESP (特に体育専攻生のための英語教育)、留学生教育、日本語教育



平成17年度の研究内容とその成果

1) リメディアル教育 (英語)

大学入学者の学力の変化に対応するため、入学者の客観的な基礎学力の測定とリメディアル (補正) 教育の必要性が求められるようになって久しいですが、本学で新生全員に英語プレイスメントテストを実施するようになって、17年度は5年目を迎えます。これを機に、今年度は日本の大学におけるリメディアル教育の実態を探り、本学のリメディアル授業「英語基礎」を振り返り、受講者の抱える問題点等を前期末に実施したアンケート調査から分析することとしました。

大学基準協会は、1982年に「一般教育研究委員会緊急報告 新制度の入学者を迎える大学」を刊行し、補正／補償教育の啓発に努めました。文部省の調査(「大学等におけるカリキュラム等の改革状況について」)によれば、1994 (平成6) 年から1998 (平成10) 年の間に全国の国公私立の大学で補習授業を実施している大学数は66校から105校へ、うち国立大学では15校から43校 (65学部) と約3倍に増えています。また各大学／学部が単独で行なうだけでなく、長崎／富山／新潟大学の3大学は、工学基

礎学力のリメディアル教育を支援するためのe-learning環境整備をはじめ、3大学工学部間でのインターネットを利用した取り組みも行なっています。入学後だけではなく、東京工芸大学は2001年度から推薦入試で早期に入学が決定した生徒に対し、入学前に基礎教育研究センターで作成した独自の問題冊子を送付し、学生が自身の学習到達度を判定し入学までに補うような指導も行なわれています。リメディアル教育に関する研究では、平成6、7年度広島大学教育研究センターが行なった調査が、国立9大学、私立6大学の学生、教員を対象にした大規模なもので、1996年刊行の『大学のリメディアル教育』という報告書にまとめられています。報告書では、リメディアル教育の目的を「大学へ入学したにもかかわらず、そのままでは正規の学習についていけない学生達の学力向上にある。大学教育の補習ではなく、その学生が入学するまでに受けた教育の補習 (補正) であることに特色がある。」と述べられています。調査の結果、リメディアル教育で最も多く実施されている科目は、高校レベルの物理、数学、化学、それに基礎英語でした。特に、理工系、農学系、自然科学系の学部で多く見ら

れました。注目すべきは、学生調査の結果、良い例として外国語科目（英語）が挙げられ（半数近い学生が「役立った」としている）、習熟度別クラス編制にも学生の支持が最も高かったことです。他教科に比べ、外国語（英語）の補習授業がうまく機能している事は、鹿児島大学の報告（羽田）でもうかがえます。

本学のリメディアル授業「英語基礎」については、アンケート調査を筆者の担当した「英語基礎」受講者31名の30名から回収しました。結果は、全体的なものと学期末試験の上位得点者10名と下位得点者10名を比べ、以下の点が判明しました。

1. リメディアル授業の開講について、学生は「基礎を勉強できる良い機会」と捉え、習熟度別クラス分けも支持率が高い。これは広島大学の研究（1996）と同じ結果である。
2. 学習困難の原因は、全体的にもまた下位グループで「自分の意欲や学習態度」と考える学生が多い。（先攻研究では、「高校で理解不十分」「教え方が悪い」「やる気が無い」が上位（20～45％）に位置する。高校で理解不十分が文理を問わず多い。）
3. 授業形態では、テキストのドリルよりインタビューを好む傾向が見られ、宿題に課したインタビューの報告レポートも半数以上がその成果を認めた。
4. リメディアル授業は、特に下位学習者に「以前は嫌いだったが少しは好きになった」と英語についての考え方を変化させる効果が見られた。

また、以下の問題点が挙げられます。

1. 下位学習者に「意欲はなく、単位さえ取ればよい」と考える者が多く、また

学習困難の原因も「意欲／態度」と回答しているのも、どうやって意欲を持たせるか。また英語に対し自信の持てない学生が多いので、どうやって自信を持たせるか。

2. 授業外では、下位学習者に「何もしなかった」者が多いので、どうやって自学学習の習慣をつけさせるか。

2) 留学生教育

平成17年度鹿児島地域留学生交流推進会議（11月鹿児島大学にて開催）において、本学が当番校で留学生と地域との交流事例について発表を依頼され、これまでの留学生の公開講座の（補助員として）参加状況、毎年12月開催の日本語スピーチコンテストおよび支援交流会の参加人数の変動等を調べ、「留学生教育－地域に支えられて」の演題で発表しました。

これからの研究の展望

リメディアル教育（英語）については、特に競技力優秀な学生にも英語の基礎力を習得してもらいたいため、今後「英語基礎」の授業だけでなく、他大学で行なわれているように入学前の指導用教材開発やe-learningの活用等を含め、今後も研究を進めたいと思います。

また留学生教育については、11月の発表で自ら「大学がもっと地域と連携し、地域に留学生の修学／生活支援者を育てていく努力をすべき」と発言したので、18年度それを実現すべく「留学生シンポジウム」を企画／開催したいと考えています。